

九〇にして自肅記

遠藤 利男

(日本エッセイスト・クラブ会長)

私はあと四カ月で満九〇歳になる。スペイン風邪から一〇年余、世界大恐慌の余波が残る一

九三一年九月、私は生まれ、翌日には満州事変が勃発した。それ以来、戦争、敗戦、復興、バブル、バブル崩壊、大震災と一世紀近くを生きた。人生の坂を上り詰めた向こうに見える風景は、環境破壊、劣化する民主主義、反知性主義。これでは私もそろそろ死に時かなと思っていたところに、新型コロナ・パンデミックが襲ってきた。罹患した高齢者は重症化し、中でも私のような超高齢者は、所謂トリアージュされ、病院の片隅に捨て置かれて終わるかもしれない。

そう思うと「コロナでは、死ぬまい」と決意が沸き上がった。

昨年五月中旬、第一回の緊急事態宣言解除後、私は東京での感染ストレスを避けて、妻と長野県にあるセカンドハウスに移った。第二次大戦を経験した私たち昭和世代の言葉で言えば「疎開」であり、私が選択した「自助」である。

折から山は春の初め。木々の枝から虫のような膨らみが吹き出たと思うと、数日の間に弾けて小さな若葉となり、透けて見えた青空をパッチワークのように埋めて行く。やがて山肌は浅緑のグラデーションに覆われた。

その山が紅葉で染まるまで続いた我々の自粛生活のルーティーンは、週に二度の巨大スーパーへの食糧の買い出し。毎日五〇〇〇歩の森の中の散歩、ほとんど人と出会うことがない。家の中では交代で三度の食事とその用意。東京から持参した本の読書、時折町の図書館に借り出しに行く。そして、コロナ情報を伝えるテレビ

遠藤 利男（えんどう・としお）



一九三一年、東京生まれ。NHKディレクター・プロデューサーとして、ラジオ「放送詩集」、テレビドラマ大岡信作「写楽はどこへ

行った」、テレビオペラ大江健三郎作・芥川也寸志作曲「ヒロシマのオルフェ」などの演出、大河ドラマ「国盗り物語」などの制作にあたる。NHK理事・放送総局長、NHKエンタープライズ社長を歴任。趣味は狂言、現在も稽古している。二〇二〇年より日本エッセイスト・クラブ会長

のニュースとワイドショウを見て、ぶつぶつと不満を呟き、昂じると政府の施策の愚かさをのしつてみたりする。このメディアの大転換期に、SNSもせず、オンライン飲み会も出来ない老人にとっては、双方向ではないが、これが唯一の世界との繋がりなのである。

「不要不急」「自粛」が、メディアで毎日呪文のように聞かされる。「自粛」は老いを加速している。毎日散歩をしているからと言っても、身体に使わない部分は日に日に「萎縮」して行くようだ。先日まで楽に取れた棚の上のものが、取れない。脳も同じ状態になっているのではないか。自分の意思欲を自粛しているうちに、それに安住してしまう。そしてこの「自粛」のムードはやがて、社会の無言の圧力によって個人を統制する力に替わってゆくのではないかと恐れる。

それにしても、パブリックの場での言語の空虚化は進むばかりだ。国会中継でしばしば見る光景だが、質問とは意図的に擦れ違った内容の答えをする、再度の質問にも同じ言葉を繰り返す。もともと説得するつもりもコミュニケーション

ヨンするつもりもないのだろう。一九五〇年代に書かれたサミュエル・ベケットの不条理劇の舞台が生きた現実となっている。例えば、「桜を見る会」の参加者について「幅広く募っている」という認識でございまして、募集しているという認識ではなかった」と前首相は答えた。この言葉、コントのギャグではないとすれば、どう解釈するか、国語の問題としては難しすぎる。

パンデミック後の世界は、ペスト後もスペイン風邪後もそうであったように、パラダイム転換が起こるだろうという論者が多い。変えなければならぬのは確かだ。しかし、どう変えるか。上記のような言説で論を進め、何処へたどり着くのだろうか。最近日本でも流布され始めたSDGs（持続可能成長目標）の尻馬に乗っていれば良しとするのだろうか。

さて、日本の古典喜劇「狂言」の一篇「梟」を紹介し、この小文を「笑い」で終わろう。

太郎の弟が山に獲物をとりに行き、帰って来ると様子がおかしい。梟の悪霊に取り憑かれたらしく「ホーホー」と言うばかりで、ぐったりとしている。太郎は悪霊祓いの呪力を持つ山伏

に祈祷を頼む。しかし、山伏の呪文は一向に効かない。それどころか、太郎にまで悪霊は乗り移り「ホーホー」と言い出す始末。山伏は、これではならじと更に念力を込めて祈る。と、あるうことか、彼さえも突然、悪霊に取り憑かれて倒れてしまう。

度々疫病・災害に悩まされた日本中世に生まれた笑劇である。

疫病を生き抜いたヒト族

森 武生

(がん感染症センター都立駒込病院名誉院長)

人間の生存の歴史は感染症との闘いである。遠くネアンデルタール人は細菌かウイルスかの感染症によって滅亡したとする説があるが、ヒト族(現代人)は辛くも生き残り、現在に至る。有史以来記録に残るだけでも、天然痘、結核、レプラ、ペスト、コレラ、インフルエンザ、AIDS、エボラ出血熱、新型コロナウイルスなど枚挙に暇がない。しかも流行には必ず世界規模の戦争が併存する。戦争に伴う人の移動が、感染症を広げるからだ。疾病と戦争により、驚くべき死者数を出しながら、それでもヒト族は、その都度何とか方策を見出して生きながらえてきた。

もつともすさまじい猛威を振るったのは、たぶん痘瘡であり、全世界で猛威を振るい、アメリカ新大陸では人口の八割近くが死亡した。この病はヨーロッパ起源で、アメリカ先住民には、抗体が全くなかったのが原因である。インカ帝国は痘瘡に滅ぼされたという説すらあるが、スペインの狂信的な征服戦争が裏にある。しかし新大陸側も、代わりに梅毒をヨーロッパにプレセントした。この疾患は驚くべきスピードで地球を半回りして、数年の間に日本に到着している。

次いでペストがある。アジアの片隅の伝染病

が、ある日突然目覚めて、西へ西へと進み、ヨーロッパ全部を流行下に置いた。全人口の四分の一が死んだのであるが、この体験の中ではつきりした隔離や検疫の考えが生まれた。都市を封鎖し、雇った人が死に絶え、雇って免疫を得て生き残った人たちだけになったら流行は止まる。感染者の出た船を一定期間、海の上に放ってお

森 武生（もり・たけお）



一九四四年、東京生まれ。一九七一年に東京大学医学部を卒業後、臨床医学の現場に。七五年以

来、都立駒込病院の外科に勤務し、外科

部長、院長を務めた。現在は吉祥寺南病院で診察を続けるとともに、途上国の医療体制整備、日赤献血事業に力を入れている。著書に『メスとパレット』I・V（婦人之友社他）。

けば、死ぬ人は死に、生き残った人は自然のワクチンを得る。前者はロンドンなどの大都会で行われたし、後者はヴェネチアが嚆矢の様である。

この時代、ヨーロッパは王位継承をめぐる戦争が絶えなかった。傭兵たちはせつせと戦争とペストを運んだ。当時貧富の差は激しく、隔離とはいえ、ボッカチオやデフォーの小説にあるように、金持ちは郊外の屋敷で隔絶した環境の中で歓楽の限りを尽くし、貧民は都市の城壁の中で、絶望的な死を待っていたようである。さまざまに不潔さ、悪臭と汚水、やがて迫りくる死、地獄図である。ヨーロッパの各都市ではこのような状況が次々と生じたようで、一つの町が丸々死滅して感染が途絶えることもまれではなかった。究極の隔離ではあった。

その後のスペイン風邪の大流行は、あまりにも感染地域が広く、第一次大戦による移動人口も多く、相手がウイルスだったために、過去の経験と知識だけでは無力であった。インフルエンザ・ワクチンなどというものは、だれもまだ知る由もなかった。

さて、日本。極東の島国は、海がかなりの守りをしてくれた。それでも痘瘡や麻疹は猛威を振るった。本来の入浴好き、清潔好きなどが水を経由した感染をある程度防いではくれたものの、鎖国中でも長崎からコレラ、ペストの小感染は起きていた。ただ、その間に蘭学者たちは貪欲に知識を吸収し、飯能における日本最初の帝王切開や、華岡青洲による麻酔下の乳がん切除など、驚くべき業績を上げ、種痘は維新前に広く行われていた。

明治に入って、コレラの大々的な来襲は、開国による人の往来の飛躍的な増加と相まって、想像を絶するものであった。原因菌は当時まだ不明で、抗生剤などの薬剤がない状態では、悪魔的な猛威を振るった。都立駒込病院の記録によれば、明治一九年には二四六〇人のコレラ患者が入院し、一八五九人は死亡している。病院の裏の寺への葬列が途切れなかったという記載がある。患者発生地区の閉鎖や、衣類の焼却、器具の消毒など基本的な処置はしているものの、完璧とはいえなかった。それでも水の管理や患者を一応隔離することにより、何とか流行は終

息した。しかし、公衆衛生学的な完璧な隔離が最も重要である、という結論には至っていない。

今回の新型コロナウイルスは、発症前に感染力を持つという点に、今までの感染との大きな差異がある。三密を防ぎ、マスク・うがい・手指消毒など初期の対応については、日本人の村八分を嫌い、流れに乗る性癖も相まって、妥当ではあった。しかし、感染の疑われる人や地域に對し、公権力を以て移動を禁じて、封鎖してしまうという完璧な隔離、つまりヨーロッパのペスト感染における教訓は、一部のヨーロッパと、アジアの中国・韓国・台湾などの国で見られなかった。罹って生き残った集団のワクチン効果はあまりに巧遅（うまいけれど時間がかかる）なので（スウェーデン方式）、全員へのワクチン接種による積極的な方策が有効なのである（イスラエル方式）。日本では初動体制の八方美人的な不徹底が今の状況を招いており、前政権の責任は大である。個人の自由との兼ね合いは難しいが、完璧な隔離と全員ワクチンが新型コロナウイルス克服の鍵と痛感すべきだ。

愚かに勇ましく生きる

轡田 隆史

(ジャーナリスト・文筆家)

東西ドイツ統一の瞬間、ベルリンのウンターデンリンデン大通りを埋めた百万の群衆にもまれながら、どこからともなく次々に回ってくるシャンパンのビンをラッパ飲みしながら夜明けを迎えた。

八十五歳にして「酔眼妄想翁」と戯れに自称し、名刺の「肩書」にもしているぼくは、最初の「非常事態宣言」が出たとき、ベルリンのラッパ飲みを懐かしく思い出しながら、いま回し飲みしたらどんなことになるかしらなどと妄想した。

と同時に、この事態は長くつづくぞと覚悟し

た。だって、予防接種のためのワクチンの国産化は夢のような話で、ワクチン先進国に土下座せんばかりに「わけてください」と頼んで回っているのだから。

国民の大半に予防接種が行き渡らなければマスクは外せないのだ。そのことには触れずに政府は、「不要不急の外出、会合は自粛してください」とくりかえすばかり。

新聞をはじめとするメディアも、あの戦争中の「大本営発表」そっくりのそれを大合唱しているのだ。

では、「酔眼妄想翁」の覚悟とはどんなカク

ゴなのか。ニンゲンは冬眠という熊や蛇たちの自然の仕組みを、急いで採用するわけにはゆかないのである。

平穏なときと同じ日常を構築する覚悟である。音楽会にも文楽にも行く。イギリスの大風景画家コンスタブル展にも行く。もちろん飲みにも行く。当然、電車にも乗る。スーパーに買い物にも行く。

轡田隆史（くつわだ・たかふみ）



一九三六年東京

生まれ。朝日新聞社で社会部デスク、編集委員、論説委員などを歴任し、世界各地へ特派。夕刊一面日「ニュースステーション」、NHK・FM「日曜喫茶室」にレギュラー出演。『「考える力」をつける本』（三笠書房）など著書多数。

ただし、である。常にマスクは二枚着用である。ポケットには、携帯用の消毒薬剤二種を持する。噴霧式とドロリと出るやつを、ひんぱんに使う。

電車で座れないときも、吊り革にもどこにも触らない。踏ん張って立っているという運動になる。ただし、大きな揺れや急停車に備えて、つかまるべきところを定めておく。

下車すれば手を消毒する。店に入るときにも消毒する。出るときもそう。「除菌ウェットシート」も持っているから、食う・飲む前には口を拭う。

帰宅したときは門に入る前に手を消毒し、玄関にはいつてまた消毒し、ついで手を薬用石鹸で洗う。

中学生のとき極東軍事裁判を傍聴して、ついこの間まで威張っていた東条元首相やヒゲの荒木元大將たちが、ショボクレ顔で座っているのを見たりした後遺症で、「お上」のいうことは信用しない体質になっている。

しかし、「消毒」だけはしっかりやっているつもり。

それで、「非常事態」の新宿の歌舞伎町にも行った。「酔眼妄想翁」だろうとジャーナリストの端くれである。「非常」時の歌舞伎町を知らなかったでは、「名」がすたる。

ベトナム戦争の末期、サイゴンにいれば安全なのに、わざわざ米軍のヘリに便乗して命がけで最前線近くまで出かけたりしたのと、まあ似たような心境である。まことに愚かにも勇ましいジャーナリスト魂ではないか（笑い）。

歌舞伎町の安全な（！）居酒屋で一杯やって帰途についた。感心にも閑散とした歌舞伎町の間から、大通りの雑踏に踏み出したとたんに、勢いよく転んだのである。

地べたで鼻を打った瞬間、不思議なことに七〇年も昔、サッカーの試合でボールを顔面にくらったときのことが、走馬灯のように鮮やかに脳裏を駆けめぐった。

プールの『失われた時を求めて』の主人公は、紅茶にひたしたマドレーヌを口にした瞬間、往時を思い出すのだけれど！　こちらは歌舞伎町のスッテンコロリンだ。

そんな愚行を告白できるのも、まさに「不要

不急」の外出をしたおかげである。
嗚呼それにしても、ワクチンはいつ来るのかしら？　と医療も女性の地位も世界最低国の妄想翁の嘆きは深い。

ココロを解放する好機！

森 孝之

(ナチュラリスト・アイトワ主宰)

岐阜県内の千二百坪の山林で、自給自足の循環型生活を目指す終の棲家を手作り中の知り合い一家から、「中学生と高校生の娘がコロナで自宅待機になり、おかげで家族揃って懸案作業に取り組んでいます」と、喜びの知らせがあった。続いて、料理人から大工に転身し、親方と結婚して京都郊外で田舎暮らしを始めた知り合いの女性が、コロナ自主閉塞の日々を、畑もある山林二千坪の自宅で仕事もはかどり「有意義に活かしています」と、弾んだ声で感謝の念を伝えてきた。

人生のある時期に工業文明や企業社会に疑問

を抱き、自然と寄り添う生活を始めた人々にとつて、コロナによる自粛生活は、災難であるより、感謝の対象でさえあるようだ。そんなわけで、わが家のコロナ騒動は、喜びの声に彩られた。まことに、人生とは「選択と決断の森」を駆け抜ける小史というべきではなからうか。

工業文明や企業社会は、消費者を「王様」とおだてあげ、一億総中流社会と油断させ、挙句のはては貧富の格差におとしこむものと睨んで、会社員生活を脱し、著作活動に入ったのは、京都郊外小倉山の千坪の土地で循環型生活を軌道に乗せた今から半世紀近くも前だった。世の

中ではバブルが露わになりかけていた。二年後に処女作で「ポスト消費社会の旗手たち」を指そう、と工業文明に警鐘を鳴らしたが、バブル全盛の世間からは見向きもされなかった。その後も、企業社会は人々に「願望の未来」

森 孝之（もり・たかゆき）



一九三八年生まれ。

工業デザインを学び、伊藤忠商事に入社、ワールド社長室長、大垣女子短大学長などを歴任。この間に親か

ら受け継いだ京都・小倉山の千坪の荒地地を、二百種千本の本が茂る自然循環型生活空間に生まれ変わらせ、「アイトワ」との愛称を与えて公開。妻は創作人形作家森小夜子。近刊にコロナ騒動のなか創造的な生き方に拍車をかけた仲間の実践事例を集めた『次の生き方 Vol.2 自然に寄り添う人たち』。

の到来を夢見させ、ハウツーやマニュアル漬けの生身のロボットのごとき企業戦士を増やし、「お金さえあれば一人でも生きて行けそう」との幻想を振りまいた。しかし、その実態は、すべての人を環境破壊の道連れにしながら、人間を単独では生きていけない自己完結能力のない唯一の高等動物、つまり「消費者」へと改造することであった。

有史以来、日々の暮らしの「生産の場」であった庶民の家屋までが、工業製品を買いあさって使い捨てる「消費の場」になった。

今から一五〇年余以前の一九世紀に、パリで開かれた第二回万博は、「人間による人間の搾取に替えて、機械による自然の活用」とのスローガンを掲げ、人々の欲望を大々的に解放する画期的な役割を果たした。だが今や、経済戦争は消耗戦の様相を呈し、地球温暖化が進み、野生生物の絶滅、南北格差拡大、あるいは難民問題やリストラなどと、弱いものから順に窮地に追いやっている。竜巻や巨大台風が明日にもわが家をまるごともっていきかねない不安が、現実のものになった。そこにコロナ禍までがやって

きたわけだ。

私たちは「必然の未来」を、見たくなくとも見据えるべき時を迎えたのではないか。

ケネディー大統領の補佐官だった、アーサー・シュレジンジャーは、「一九世紀の偉大なる英雄たちは二一世紀の極悪人への道を歩みつつある」と助言した。昨年は、コロンプスを始め多くの英雄たちの像が、民衆の手によって破壊され、そうした像を設置していた施設が自主撤去するニュースが次々と流れた。いよいよ「必然の未来」を希求する民衆の想いが露わになり始めた、と見た。

しかし、世界のリーダーは（ヒトに寄生しなければ自活力のない）コロナウイルスを人類共通の敵とみて結束すれば、二週間もあれば干上がらせ得るとの説もある中で、いまだに国や人を分断し、イタチゴッコに陥れている。このままではワクチンなどを巡って新たな格差を露わにさせるキツカケになりかねない。

思えば、人類史は「ドロボウ史」であった。産業革命以前は人が人を搾取する「カラダドロボウ」であり、その後はきれいな水や地下資源

などをむさぼる「自然ドロボウ」を流行らせた。そして今や日本では付度に支えられた「権力ドロボウ」の時代になり、ココロまで蝕む末期的症状を呈している。

コロナ禍の今こそ、家屋を、お金という目に見えない鎖に縛られた檻に留めず、世界の趨勢に目を向けながら足元の暮らしを見つめなおし、欲望の解放ではなくココロの解放を求め、手作り文化の綾なす時空へと再構築する好機として活かすべきだ。

人生とは、大胆な「方向転換」もいとわぬ心構えが誘う小史でもある。

万葉びとを襲った神病

えやみ

堀尾 眞紀子

(文化学園大学名誉教授・美術史研究者)

コロナ禍による外出自粛で経済はもちろんだが、文化芸術もすっかり息を潜めていて寂しい。担当している成人学級や市民大学のうち、五年目に入る万葉講座が幸い六月から再開される目処がたち準備にいそしんでいる。このパンデミックを予想だになかった一昨年の講座の折り、万葉の人々にとつて下紐、つまり下着の紐は貞操帯の意味合いもあったという話の中で、次の歌を紹介した。

物思ふと人には見えじ下紐の

下ゆ恋ふるに月そ経にける

(巻十五―三七〇八)

そしてこれは遣新羅使の大使、あべのつぎまろ阿倍継麿の歌であること、新羅へ渡った帰路、疫病に襲われ、無念のうちに対馬で没したこと、当時大流行した鬼病、天然痘がいかに恐ろしいものだったかを「千三百年も昔のことですが…」と話した。

ところが何と！この二ヶ月ほど後、思いもしなかったコロナの流行が始まったのだ。まるで大昔の疫病の目を覚まさせて呼び寄せてしまったような心苦しさに、思わず皆さんに謝った。

阿倍継麿は身分高い貴族、聖武天皇の命により天平八年、多くの随員を引き連れ六月、大阪難波の港を出発している。当時の航海は大きな

危険を伴い、途中で海の藻屑になった者も数多い。新羅への大使着任以来、彼は内心悶々として多くの切々とした歌を残している。先の歌の意、「物思いに沈んでいるとは人には知られない。しかし下紐のように下心に妻を恋い焦がれているうちに月日も経ったことだ」。弱音は吐けない大使ゆえの慟哭がうかがえる。

万葉集の巻一五には、この遣新羅使にかかわ

堀尾眞紀子（ほりお・まきこ）



東京芸術大学美術学部大学院修了。フランス国立パリ工芸大学留学。奈良県立万葉文化館運営委員、万葉古代学研究所客

員研究員等を歴任。主な著書に『画家たちの原風景』（第三五回日本エッセイスト・クラブ賞受賞、NHK出版）、『フリーダ・カロー』（中央公論社）、『絵筆は語る』（清流出版）、『女性画家 10 の叫び』（岩波書店）ほか。

る歌が一四五首収録されており、その一首目。

武庫むこの浦の 入江の洲鳥すどり 羽ぐくもる

君を離れて 恋に死ぬべし

（巻一五―三五七八）

「武庫の浦の入江の洲鳥がひなをはぐくむように私を大事にしてくださいとあなたと離れたら、私は恋しくて死んでしまうでしょう」。

波の上に浮き寝せし夜あど思へか

心悲しく夢に見えつる

（巻一五―三六三九）

「波の上に漂って寝た夜に、どうしたことだろうか心悲しげな妻の姿が夢に見えたことよ」。

一行に雪連宅満ゆきのむらじやまらうという占い師がいた。その日

の天候や風を読みながら航海の無事を占い、先導する役目の人であった。大嵐に遭い船が中津の海岸に流され、九死に一生を得て安堵した時の歌がある。「題詞」に「旅のあまりの辛さに嘆き悲しんで作った歌八首のうちの一首」とある。

大君の命恐み大船の

行きのまにまに宿りするかも

(卷一五—三六四四)

「大君の命令を尊んで、大船の進み行くままに旅の宿りを経てまいります」。真意は、命令に従わざるを得なくつて、あまりに辛い厳しい船旅に振り回されていることよ、だろうか。

何度かの暴風雨を踏み越えながらの航海は予定よりも大幅な遅れをうみ、何とか博多湾入港時、すでに季節は秋となっていた。ここで大宰府の役人への表敬訪問を行ったが、実はここ太宰府ではこの時、天然痘が流行していた。遣新羅使のうちの何人かが罹患し、宅満もその一人。再び船に乗り込んで出航した彼らだったが新羅へ向けて壱岐島にたどりついた時、すでに病がすっかり重くなっていた宅満は息をひきとる。

岩田野に宿りする君 いへびと 家人の

いづらと吾れを問はば いかには言はむ

(卷一五—三六八九)

岩田野とは隠岐の島南岸、その岩場に葬られた宅満に手を合わせ仲間が詠んだ歌。「家で待っている家族に、あの人はどうしたの？どこにいるの？と聞かれたら、何と答えたらよいのか」。

一方、帰路に對馬で亡くなった繼磨は大使、つまりトップであったが、帰還の折は死者が多く混乱していたのか、悼む歌も残されていない。残るのは出立の時と、往路の歌がほとんどで、帰路に詠まれた歌は五首のみである。多くの使節団員のうち半数以下しか戻れなかったという資料もある。

繼磨の死後、残された遣新羅使がやつとのことで平城京に戻るとたちまち天然痘が蔓延、当時の日本の総人口の約三割にあたる一〇〇万から一五〇万人が亡くなったといわれている。

当時の政府がこの事態にどう対応したかの記録が残っている。朝廷から国司に、予防と治療に関する情報を書面で伝達、百姓に伝えるよう命令。その際、迅速化を図るため必要な印の数を減らしている。薬、米の配布、租庸調の調の減免、また疫病のモニタリング制度導入など。奈良時代は現代の私たちが考えているよりずっと政府が機能していたようだ。また聖武天皇は「この疫病は自分の不徳の致すところ」と深く責任を感じ、仏教に更に帰依するため、東大寺建立、大仏造営、全国に国分寺が建立されるこ

ととなる。七四三年には、衰退した農業振興のため墾田永年私財法を制定し、農地の私有化が図られた。

しばしば襲って来て家族や親しい人をさらっていく疫病は、昔の人々にとって恐ろしい事この上なく、まさに鬼の仕業と映ったことだろう。厄払いのための鬼やらい、門口に鰯の頭と柊の葉、茅の輪くぐり、夏祭、隅田川の花火などの行事が今に伝わっている。疫病は日本の暮らしにこれだけ身近だったことを思い知らされる。その恐ろしさを、今回のコロナ禍で感染者が続出するまで、私たちは忘れていたようだ。